

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：33804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02846

研究課題名(和文) 養護教諭の相互調整スキルの質的検討と養成段階での育成プログラムの開発

研究課題名(英文) Qualitative analysis of yogo teacher's skills in coordination with a classroom teacher and the development of program to enhance these skills in training phase.

研究代表者

長峰 伸治 (Nagamine, Shinji)

聖隷クリストファー大学・看護学部・教授

研究者番号：50303574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、養護教諭が学級担任と連携を行う際、意見が異なる場合に双方の考え・意見を調整するスキル(相互調整スキル)について調査・検討を行った結果、大学生と養護教諭の間で、質的な違いが明らかになった。養護教諭に比べて大学生は、支援を行う上でのパートナーとして担任の立場や考えを尊重することや、担任と自ら(養護教諭)の意見の調整を行うことへの意識が薄いことが分かった。また、大学生を対象とした「相互調整スキル」育成プログラムを開発・実施したところ、実施前後でこのスキルに改善がみられ、プログラムの効果が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で、大学生と養護教諭の間で、相互調整スキルに違いがあることが明らかになることにより、養護教諭が担任との間で意見等の調整を行う上で大事にしているポイントがわかり、学校における教職員間の連携・協働の促進につながる。

また、このスキル育成のプログラムが開発され、効果が示されたことにより、本スキルを養成段階で習得・向上する機会を得るだけでなく、「学級担任との連携」に困難を感じている経験が浅い養護教諭のスキルの習得・向上も可能になる。それは、児童生徒の支援がより良いものになるとともに、養護教諭本人の困難感や不適応感の解消または連携に対する自信の増加にもつながる。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the skills of a school nurse teacher in negotiating with a classroom teacher when they have different opinions in situations of supporting for a pupil, and found qualitative differences between university students and school nurse teachers who answered the questionnaire. Compared to school nurse teachers, university students were less conscious of understanding and respecting the classroom teacher's position and ideas as a partner in supporting for pupils, and of coordinating the opinions of the classroom teacher and themselves (school nurse teachers).

We developed and conducted a program to improve these skills among university students. These skills improved after the program, indicating the effectiveness of the program.

研究分野：心理学

キーワード：養護教諭 相互調整スキル 学級担任との連携 育成プログラム 養成段階

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

学校における児童生徒の心身の健康問題への取り組みの中で、関係者間の連携体制の中心的、コーディネーター的役割を担うことが求められる養護教諭は、教育相談など児童生徒の心理的支援を行う際、学級担任と連携しながら進めることが重要であるが、そのことを困難に感じている養護教諭が少なくない。「担任との連携」が上手くいかない時に、いかにして担任の考え・意図と養護教諭自らのそれとを調整して、よりよい連携・協働にもっていかが必要となるが、そうした養護教諭のスキルを調べた研究はこれまで見当たらない。

また、困難を感じる養護教諭が多いにもかかわらず、免許取得前の養成段階でも、就職後でも、関係者と連携する際のコーディネート(調整)力に特化して育成する科目の開講や研修はほとんど行われていない。養護教諭が学級担任と連携する際、特に双方の考えが異なる時に、具体的に調整する方法(スキル)を、養成段階で育成するプログラムを開発することは喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の二つである。養護教諭が学級担任と連携を行う際、意見が異なる場合に双方の考え・意見を調整するスキル(以下、相互調整スキル)に焦点をあてて、養成段階の大学生と現職の養護教諭との間で、質的にどのように違うのかについて調査・検討を行う、養成段階における「相互調整スキル」育成プログラムを開発・実施し、この効果の評価を行う。

3. 研究の方法

1) 「相互調整スキル」の調査

心理的問題を持つ児童生徒に関する支援において養護教諭と学級担任の考え方が異なる場面(以下、不一致場面)を設定して、その場面で「あなたが養護教諭だったら、この担任に対してどのような関わりをするのか?」について、具体的な言葉かけの内容、及び、そのような言葉かけをする理由を尋ね、自由記述で回答する形式にした。不一致場面は2種類(保健室登校、クールダウンで保健室使用)を設定して、それぞれについて上記質問の回答を得た。

調査対象者は、現職の養護教諭 115 名、養護教諭を目指し教職課程を履修している大学生 51 名であった。

2) 「相互調整スキル」育成プログラムの実施

相互調整スキルを養成段階で修得できるようにするプログラムを開発・実施した(ワークショップ形式)。学校現場で起こりそうな養護教諭と担任の意見が異なる場面について、自分が養護教諭だったらどのようにするか、担任に話しかける際の言葉について、まず各自個人で考え、その後、3～4名のグループで討議して、より良く連携するための意見の調整方法について検討する。その際、話し合いだけでなく、養護教諭役と担任役に分かれて、ロールプレイをしてお互いにフィードバックをすることも行った。検討の初めにファシリテーターから「学級担任と養護教諭はともに、対象児童生徒を支援するチームのメンバーであり、協力すべきパートナーであること」「養護教諭としての自らの考え・意見を大事にしつつも、一方的に主張するだけにならないようなコミュニケーションを心がけてみること」等、検討を行う上でのポイントを参加者に伝えた。最後に、グループで考えた言葉とその理由を発表して参加者全体で共有した。

プログラム参加者は、養護教諭を目指す大学生 20 名。プログラムは約 60 分、10 名ごとに実施した。参加者はプログラムの前後に、上記 1) で実施した「相互調整スキル」の調査用紙を回

答した。

4. 研究成果

1) 「相互調整スキル」調査について

本調査では2種類の不一致場面を設定して、それぞれについて自由記述で回答を得たが、ここでは「保健室登校」の場面の結果について記す。場面設定は以下のとおりである「1年生3学期から欠席がちになり2年生4月にかけてほぼ毎日学校を休むようになった中学2年生のA子は、2年生の5月の連休明けから保健室登校を始め、ここ1か月間は毎日登校するようになる。クラスに入ることはできていないが、クラスメートが昼食時に保健室を訪れると楽しそうに雑談することも増えてきた。このようなA子を見た担任は『学習面の遅れが大きくなるようにするためにできるだけ早くクラス復帰をさせたほうがA子にとって良い』と思い、クラスに入るような刺激を与えるのが良いと養護教諭に言ってきた。一方、養護教諭は『この1か月間ようやく安定して保健室登校をするようになってきたところで、A子自身も保健室登校を続けたいと言っているので、クラスに入るようA子に言うのは時期尚早である』と持っている」。

この事態を解決するために、養護教諭の立場だったら、担任に対してどのように言うのか(具体的な言葉)を尋ね自由記述で得られた回答について質的分析を行った。一人ずつ言葉を意味のまとめ(1~3文程度)で区切り、それぞれの意味に基づいてカテゴリーに分類した。各カテゴリーがどの程度出現するかの割合(%)を「大学生(養成段階)」「現職養護教諭」の2群間で比較を行った。その結果、特に以下の2つのカテゴリーにおいて、両群間で有意な差が見られた。

「担任の意見を受け止める」

このカテゴリーは「学習面の遅れについては確かに気になるので、先生のお気持ちはわかります」「先生は、A子さんの今後のことを考えて、勉強の遅れを心配してくださっているんですね」「先生が心配されている学習面の問題については私も心配です」など、担任としての立場や意図を理解していることを伝える言葉である。各群の出現割合(%)は「大学生」29%、「養護教諭」50%であった($p < .05$)。「大学生」では担任の意見(学習面での遅れが大きくなるようにクラス復帰を促す)に触れることなく、クラス復帰への刺激はまだ早いなどの養護教諭としての考えの主張に終始するケースが多く、一方、現職の養護教諭はまず初めに「担任の意見を受け止める」言葉をかけて、自らの考えを説明するケースが多く見られた。

「当該生徒の意見に頼る」

このカテゴリーは、「A子さんがどう思っているかが一番大事など思うので、まずはA子さんの気持ちを聞いてみましょう」「本人の意見を尊重して、今の段階では保健室登校を続けたほうが良いと思う」(それぞれ、この言葉のみ)のように、この事態を解決する上で一番の方法はA子本人の意見次第であるとする言葉である。A子の意見を「尊重」しているように見えるが、担任との調整は行わず、A子の意見に委ねることで事態をおさめようとしている。出現割合は「大学生」37%、「養護教諭」18%と両群で有意な差が見られた($p < .01$)。担任との意見の違いを調整することなく、A子本人の考えに頼る(委ねる)ことを優先する「大学生」の割合が「養護教諭」よりも多かった。

以上との結果からは、現職の養護教諭に比べて大学生は、A子の支援を行う上でのパートナーとして担任の立場や考えを尊重することや、担任と自ら(養護教諭)の意見の調整を行うことへの意識が薄いことが示された。A子にとって今、登校刺激を行うことは良くないという自ら

(養護教諭)の考えを主張すること()や、当事者であるA子の考えを優先すること()に重点が置かれすぎたため、担任と意見等の調整を行うことへの意識がおろそかになったと考えられる。

2)「相互調整スキル」育成プログラムの効果について

上述の方法で実施したプログラムの効果を明らかにするために、上記1)と同じ場面でのプログラム前後の参加者の回答について比較した。1)で大学生と養護教諭の間で顕著な差が見られた2つのカテゴリーに関する出現割合を調べた。その結果、「担任の意見を受け止める」では、プログラム実施前は25%、実施後は65%と増加した($p<.05$)。また「当該生徒の意見に頼る」は、実施前が55%、実施後は10%と減少した($p<.05$)。

「担任の意見を受け止める」が増え、「当該生徒の意見に頼る」が減るということは、担任の意見や立場を理解・尊重して、支援を行うパートナーとして担任を認識していることを示しており、担任と意見等の調整を行おうとする意識が高まったと考えられる。このプログラムによって、上記1)で明らかになった現職の養護教諭の多くが用いるスキルを身につけた大学生が増加したことが示唆され、本プログラムの効果が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------